

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 64 回 「税金」を知らない国民～大変な事態である！

小生、納税貯蓄組合活動をやっている。「納税貯蓄組合とは何ぞや？」ということに関しては、このホームページからでもリンクして調べて頂きたい。納税貯蓄組合活動の主要な一つに、納税意識の昂揚と税知識の普及活動がある。その流れに即し、子供たちの租税教育のその一環として、「中学生の税に関する作文」の募集、コンクールを毎年実施している。

今年もすでにその審査を終了した。地元熊谷税務署管内でも、1,300から1,500作品の、貴重な応募を頂いた。400字の原稿用紙、たかが3枚というものの、中学生が真面目に、真剣に書いてくる作文を読みながら、その優劣を決めなければならない審査は、誠に辛いものである。「税金」という、それだけのテーマで、3枚の原稿を書き上げる、我々大人でも、正直大変なことである。中には本当に感心する提案があったり、感動する文章があったりで、多いに反省させられる、... 貴重な体験をさせて頂いている。

毎年、その機会に感じることであるが、中学生の作文、決まって書き出しは ...

「今まで税金のことはほとんど知らなかったが、今回初めて調べてみました...」。

中学生の無知を叱責するつもりは毛頭ないが、こと、税金に関しては、こんなことすら教えてもらってない、その無教育さに愕然とする。中学生にもなって、国を支える、国民の義務である「税金」を知らない、いや、教えていない国なんて、恐らく、日本ぐらいしかないだろう。

いかに偏差値が上がろうと、いかにスポーツが出来ようと、税金やその仕組みを知らない子供達、税金に無頓着な学校の先生、それを許している文部科学省、いずれを見ても実に「片輪」(差別表現?)な現象といわざるを得ない。公立学校(私立も助成がある)の施設、備品類、教科書、担任や教頭、校長の給料、それを監督する教育委員会や文科省のお偉いさん、我々以上に「税金」のお世話になっている筈である。

税金やその仕組みを、十分レクチャーされずに世に出る子供達、「可哀想」と思いませんか？ 世の中、税金と無縁な生活はありえない。「知らなかった、悪意はないが、脱税しました」は通らない。国を支える国民としての意識を^{はぐくむ}育てることを教えずして、何のアイデンティティと誇りを所持できるのだろうか？

将来を担う子供達のために、今こそ真剣に「租税教育」のあり方を見直すべきである。租税教育とは、学校の先生だけの問題ではない。家庭と社会と、学校が連携して子供達を導いてやらなければならない筈である。「税金」を知らない子供達、下手すると、そのまま「税金」を知らない学校の先生、「税金」を知らない大人たち...、今の日本はそんな状況になってしまっているのかもしれない。そうだとしたら、大変な事態である。